

運命を切り開く力 脱出と解放の系譜

脱国までの新島襄



- 幼年期・青年期の新島
-21歳まで江戸の安中藩邸内で暮らす
- 空間的な制約:鎖国
- 時代的な制約:封建的な社会秩序

2

新島の新しい一歩

- 「壁」を壊す、「運命」を切り開く
- 「自由」を求めて



3

なぜ日本を脱国したのか?

- ボストン到着後の新島がハーディ夫妻に宛てた手紙
- 「私はなぜ日本を脱国したのか」(1865年)



4

手紙の内容

- 知的好奇心・探求心
- 「創造者なる神」との出会い
- 世界観の変化
-自由へのあこがれ
- リスクを負うこと

5

聖書とは?

- 旧約聖書 (39巻)
-「ヘブライ語聖書」とも言う
-律法(生活規範)・イスラエルの歴史
- 新約聖書 (27巻)
-イエスの物語(4つの「福音書」)
-教会の歴史

6

旧約聖書に見る「脱出」「解放」

•空間的解放

- 出エジプト(Exile からの Exodus)
- 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」(出エジプト記20:2)

7

旧約聖書に見る「脱出」「解放」

•時間的解放

- 「安息日」の遵守
- 「天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された。」(創世記2:1-3)

8

新約聖書に見る「自由」

•真理による自由、解放

- 「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」(ヨハネによる福音書8:32)

9

新約聖書に見る「自由」

•クロノスとカイロス

- 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコによる福音書1:15)

10

現代における課題

- 現代社会における「壁」とは何か、「運命」とは何か。
- 「わたし」にとっての「壁」とは何か、「運命」とは何か。

11



書いたもので、聖書の中のものも重要な出来事だけが記してあった。私はそれを彼から借り、夜に読んでみた。なぜなら聖書を読んでいることが知れると、幕府は私の家族全員を磔にするので、私は野蛮な国のおきてを恐れていたからだ。

私はまず神のことが理解できた。すなわち神は天と地を分けたうえ、光を始めとして草木や鳥獣、魚などを「次々と」地上に創造された。神はご自身の姿に似た形に男を創り、そして彼の脇腹の骨を切り取って女を創られた。神は宇宙のすべてを創造した後で休まれた。その日を私たちは日曜日または安息日と呼ばねばならない。

次に私はイエス・キリストが聖霊のみ子であること、その方は全世界の罪のために十字架につけられたこと、それゆえ私たちはその方を私たちの救い主と呼ばなくてはならないことを理解した。そこで私はその本を置き、あたりを見まわしてからこう言った。「誰が私を創ったのか。両親か。いや、神だ。私の机を作ったのは誰か。大工か。いや、神は地上に木を育てられた。神は大工に私の机を作らせられたが、その机は現実はどこかの木からできたものだ。そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して正直にならなくてはならない」と。

ともなく、ひたすらこの身を神のみ手にゆだねた。

翌朝私は箱館行きの洋式帆船に乗りこんだ。箱館に到着して適当な英語の教師を探したが、八方手をつくしても見つけれなかった。そこで私の心は一転して、国外脱出を考えるに至った。

しかし、私はためらった。祖父や両親を悲しませるだろう、との思いがあったからだ。その思いがしばらくの間私の心を捉えた。けれどもやがて別の考えが頭にひらめいた。それは、私は両親から生まれ育てられたが、本当は私は天の父のものである。それゆえ私は天の父を信じ、その父に感謝し、そしてその父の道を進まなくてはならない、という考えである。こうして私は日本から連れ出してくれる船を探し始めた。

あれこれ苦労した末に、私は上海行きのアメリカ船〔ベルリン号〕に乗りこんだ。上海の河口に到着ののち、ワイルド・ローヴァー号に乗り換え、約八カ月間中国沿岸を往来した。神に守られて、四カ月間航海したのちボストン港に着いた。

初めて〔同号の〕H・S・テイラー船長に〔上海で〕会った時、「もしアメリカに到着したら、お願いですから学校に行かせてください。よい教育を受けさせてください

この時から私の心は英語の聖書を読みたいという思いに満たされたので、箱館に行つて、イギリス人かアメリカ人の聖書の教師を見つげようと決意した。そこで藩主と両親に対して箱館に行かせてほしいとお願ひした。しかし、彼らは許してくれず、私の願ひが大変驚いた。彼らは私をこんこんと諭したが、私の固い決意は変わらなかった。私は自分の願ひを持ち続け、神に向かつて、「どうかお願いですから志を達成させてください」とひたすら折っていた。

それから私はある日本人の教師から英語を習い始めた。ある日、江戸の街中を歩いていると、私の知人で私を可愛がってくれていた洋式帆船〔快風丸〕の船長〔船員の加納格太郎〕に突然出くわした。「船はいつ出るのですか」と聞くと、「三日以内に箱館に向けて出帆することだった。連れて行つてもらえますか。お願いですから行かせてください」と言つたところ、「連れて行つてもいいが、君のお殿さまとご両親がお許しにならないだろう。まずそちらに頼むことだ」と彼は答えた。

二日後、私はいくらかの金と少しばかりの衣服、それにわずかな書物とをたずさえて家を出た。もしこの金がなくなつたらどうやって衣食をまかなうのかを考えるこい。そのため私は力の限り船内で働きますし、あなたから賃銀をいただくつもりもありません」とお願いした。船長は「帰国したら学校に通わせてやろう。そして船内では私の使用人として働かせてやろう」と約束してくれた。船長は金銭こそ支給してくれなかったが、衣服や帽子、靴、その他のものを買ってくれた。船中では航海日誌のつけ方、緯度、経度の測定の仕方を教えてくれた。

当地〔ボストン〕に着くと、船長のおかげで長い間船内にとどまることができた。その間私は船を守る荒くれた不信心な船員たちと一緒だった。港の人は誰も彼も次のように言つて私をおどした。「南北戦争以後、物価があがつたので、陸の上ではおまえに救いの手を差し伸べてくれる者など一人もいないぞ。残念だが、もう一度海に戻るしかない」と。

私は衣食のために相当働かなくてはならないとも思つた。学校に納める金を稼ぐまでは、とうてい学校には入れない。そのような考えにとりつかれると、私はあまり働く気が起こらず、また本も楽しく読めなかった。精神に異常をきたした人のように長時間ただあたりを見回すだけだった。毎晩、ベッドに入つてから「お願いですから私をみじめな境遇に追いやらないでください。どうか

私の大きな志を成就させてください」と神に祈った。
 それから私は船の持主であるハーディーさまが私を学
 校へ送り、経費を一切出してくださるかもしれないこと
 を知った。船長からこのことを初めて聞かされた時、私
 の両眼は涙にあふれた。氏への感謝の気持が大きかった
 だけでなく、神は私をお見捨てにならない、と思っただ
 らである。

1 快風丸

備中松山藩(岡山県高梁市)が一万八千ドルで購入したスクリーナー船(洋式帆船)。購入には同藩の山田方谷、川田剛などが尽力した。藩主の板倉勝静は新島襄が属した安中藩の藩主(板倉勝明)の自家筋に当たり、幕末には主席老中として將軍(徳川慶喜)を補佐した。この船が江戸と玉島(備中松山藩。現倉敷市)間を試運転した際、新島は勝静の許可を得て、乗船。初航海である。それまでの狭い藩邸中心の生活に比べて、広々とした外界の空気を初めて満喫できた新島には「密出国」の夢を育むきっかけとなった。旅行記として「玉島紀行」を残した。

翌一八七四年、快風丸がサハリンへ航海することを知った新島は再度、勝静から便乗の許可をとって箱館まで赴いた。「密出国」への第一歩である。途中、興津(千葉

2 ニコライ神父

「神田のニコライ堂」で有名なニコライは、箱館で四十日間、新島襄を住みこませた。新島は武田塾への入塾が果たせず、菅沼精一郎の紹介で当時ロシア領事館付司祭のニコライの家庭教師となった。ニコライは新島より七歳年上であった。新島はニコライに『古事記』などを教えるかたわら、彼からさまざまな事を学んだが、性病の恐ろしさもそのひとつであった。新島はニコライに密出国の希望を漏らしたが、「お前さんは若い人には珍しく、決して遊び歩いたりしないから私がここで十分に世話してやろう」と反対された。

不可解なことに、新島は帰国以後死去するまでの十五年間、日本伝道に従事していたニコライに会おうとしない。一方のニコライは時に日記に新島の動向を書き記している。

コラム・その1



30 山田方谷
 手県、下風
 呂(青森県)
 に寄港し
 た。箱館紀
 行」③はこ
 の時の日記
 である。



31 ニコライ神父